



花き園芸

〜花と緑の季節です〜

公園や学校の花壇、自宅の庭先や玄関など、まち全体が花や緑であふれる4月。花を育て市場へ出荷する花き園芸農家では、かき入れ時を迎えています。

市内で花き園芸が盛んに行われるようになったのは第二次世界大戦後のこと。温暖な気候と東京などの大消費地域に近いことなどが愛知県を全国有数の花き生産地に押し上げ、岡崎市の花き園芸発展のきっかけとなりました。現在も、市北部・南部・東部を中心に、消費ニーズに合わせて出荷時期を調整できる「ハウス栽培」などが盛んに行われています。

最近の県の調査によれば、市全体の花き出荷額の大半がハウスで育てられた「鉢物」とよばれる植物で、同じくハウス栽培の「切り花」や「花壇苗」の出荷額を大きく上回っています。「鉢物」の主力をなしているのは花を楽しむラン類や緑の葉を楽しむ観葉植物です。品種や

サイズも多種多様。手間隙かけて育てられた「鉢物」は、主に県内や関東地方へ出荷され、一部は「おかざき農遊館」や「ふれあいドーム岡崎」などの地元産直施設で販売されています。

市内12軒の農家が集まる岡崎市花き温室園芸組合の鈴木藤弘会長は「岡崎市の花き園芸は県内の知多市や田原市のような大規模なものではありませんが、各農家の探究心と丁寧な仕事ぶりが質の良い商品につながっています」と胸を張ります。また、長引く不況による消費低迷の影響について尋ねると「確かに厳しいです。でも、花や緑は見るだけで人の心を癒してくれます。それに、花壇苗や切り花は人々の暮らしに定着しています。さらに、鉢物ほどもらって嬉しいものはありませんから」と、暮らしに癒しとゆとりをもたらす花づくりの達人らしい前向きな言葉が続きます。



鉢物と花壇苗

4月9日・10日には、ふれあいドーム岡崎で市内農家が育てた花きの展示即売会が開催されます（詳しくは10ページに掲載）。地元産の花や緑を使って、自宅を春色に演出してみたいかがでしょうか。

農務課 023◆6199

「よくわかま病気の話」

がんの骨転移による痛みの治療

―放射性ストロンチウム注射―

前立腺がんや乳がんなどは、骨に転移しやすく、時として強い痛みを伴います。通常、がんによる骨の痛みには、麻薬を含んだ鎮痛剤・ホルモン製剤・抗がん剤などを投与していきます。痛みの部位が少ない時には、神経ブロック注射・手術・放射線照射などで治療する場合もあります。さらに、痛む部位が多数あり、通常の方法では鎮痛効果が得られない時には、放射性ストロンチウムによる疼痛緩和治療を行います。

この治療は、市民病院で最近導入したもので、放射性ストロンチウムという薬剤を注射により投与する治療法です。治療を受けた患者さんの約8割に何らかの改善が見られ、薬が効けば注射後1〜2週間痛みが和らぎ、その効果が平均で3カ月持続すると言われています。

注射に含まれる薬は骨に集まりやすく、転移病巣では正常の骨より長くとどまります。骨に達した薬からは放射線が発せられ、痛みを和らげてくれます。放射線を発するといっても、体内では最大約8ミリの範囲しか影響を及ぼさず、周囲の人が被ばくする心配はありません。

この治療には入院の必要はありませんが、副作用として血小板や白血球が減少することがありますので、定期的な血液検査が必要となります。

実際にこの治療を受けるには、一定の条件があります。関心のあるかたは、かかりつけの主治医の先生を通して市民病院にご相談ください。

岡崎市民病院 医局長

放射線科 渡辺 賢一

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。